

ど、大坂のこちへ遣せを京で爰へ來しや○中

三都と詞をわけて云時には江戸詞は耳立聞え、京大坂とはさまで替りたる詞もなし。是は詞の延縊引が放すがといふ計の違ひなれば也。江戸とても尊き人々には聊も詞は替りたることなき者也。いはべ文通書狀に書送るに、江戸なればとて、訛を入れて書送ること有まじ。それにて通る所を見れば、江戸詞とは中分より下賤の詞也。○中

上方にて買て来るを江戸にては買て来る、借りて来るを借りて来る大きいを恐ろしい仰山を大騒、そふじやさかいをだから、様をお娘様。○下

〔物類稱呼五語〕助語につくことなり京師にてナ、八瀬大原邊にてニヤ、橋本邊にてノヨ、大和にてナヨ、攝津にてノヤ、播磨にてノ石見にてケニ因幡にてケン、但馬にてガア、紀伊及豊後にてニ、豊前にてメセ、西國及中國にてドモ、テヤ、土佐にてナア、ノヲ、チヤ、尾參遠、駿、甲信にてズ、武藏にてケ、上總にてサ、下總にてナサイ、安房にてサア、上下野州にてムシ、越後にてナ、加賀にてナ、陸奥にてサア、出羽最上にてベ、同國庄内にてチヤ、同國秋田にてサイ、關東にてベイ、美濃にてチヤ、畿内近國の助語にさかひと云詞有、關東にてからといふ詞にあたる也。からと云詞故といふに同じも吹に也。

〔貞丈雜記十五言語〕一何とすべい、行くべいなど、云べいの詞は源氏物語、枕草紙、其外古書にあり、今も田舎にはべいと云詞あり、べいはべき也。可の字也。キトイ五普通する故、べきと云事をべいと云也。江戸の人々、田舎者のべいと云詞を笑ふは非也。

〔萬葉集十四〕相聞

駿河能宇美、於思敵爾於布流波麻郡豆夜、誤恐伊麻思乎多能美、波播爾多我比奴、

右五首○四駿河國歌○中